

報 告

1歳6か月児の精神発達指標, 生活および
テレビ・ビデオ視聴時間の関係

齋 藤 好 子

〔論文要旨〕

1歳6か月児の精神発達指標や生活, テレビ・ビデオ視聴時間の関係を探求するため, 横浜市の2区にて質問紙法により調査した。500世帯を対象に配布し, 回収率は60.0%であった。

精神発達指標は言葉数, 外遊び時間とは正の, 子どもがテレビを視聴する時間とは負の相関があった。

また, テレビがついている時間と子どもが見る時間には, 強い正の相関があった。平日にテレビがついている・見ている時間の長さは, 外遊び時間と負の相関があった。そして, 食事時にテレビを消している世帯は, テレビをつけたり, 見ている時間が短かった。

子どものテレビ・ビデオの視聴時間を短くするには, 食事時に消すことから着手することが示唆された。

Key words : 1歳6か月児, 精神発達指標, 幼児の生活, テレビ・ビデオ視聴時間

I. はじめに

日本でテレビ放映が1953年に開始されてから, 半世紀以上経過した。放映開始当時866台であったテレビは, 1994年には1.5人に1台の割合となり, 世界第3位であった¹⁾。そして, 2003年ではテレビのある世帯割合が世界一であった²⁾。そのうえ, 現在テレビ放映は24時間なされている。そのため, 日本の子どものほとんどは出生直後からテレビの刺激を吸収し始める。

近年, 待てない, 聴けない, 集中できない等, 子どもの状況の変化³⁾が指摘されており, 子どもの言語発達とテレビ視聴との関係を指摘するもの^{4,5)}もいくつかある。2004年に日本小児科学会は2歳以下の子どものテレビ・ビデオを長時間見せないように等6項目の提言を発表した⁶⁾。日本小児科医学会も同様の提言を行っている。

る。しかし, 精神発達や生活とテレビ視聴との関連は未だ一般化されていない。

一方, 日本よりもテレビ先進国であるアメリカでは, 1980年にテレビ視聴と精神発達や暴力等が関連していることを示唆する文献をまとめた書籍が出版されている⁷⁾。また, 1990年には「子どものテレビ視聴法」が制定された。アメリカ小児科学会は1990年に, 小児科医が両親に対して2歳以下の子どものにはテレビを見せないうよう説得することを勧めた⁸⁾。子どものテレビ視聴習慣形成における家族の役割の重要性が認識されている⁹⁾。テレビ・ビデオ視聴と肥満^{10,11)}, 暴力¹²⁾, 学力低下¹³⁾, 注意欠陥との関係¹⁴⁾等が検討されている。また, アメリカではテレビに「チャップ」と呼ばれる, 番組をブロックし子どもを守る装置が装備されている。メディアについての教育¹⁵⁾や, テレビを見せる時間を短くする教育方法の研究¹⁶⁾も行われている等,

The Relationship between a Mental Development Index for 18-Month-Old Infants,
Their Daily Life and Their Television/Video Viewing Hours
Yoshiko SAITO

(保健師/看護学科教員)

別刷請求先: 齋藤好子 〒242-0005 神奈川県大和市西鶴間6-18-18

Tel/Fax : 046-272-7422

[1922]

受付 07. 3.22

採用 07.11.19

テレビの影響に関する研究が深くなされている。

本研究は1歳6か月児の精神発達や生活とテレビ・ビデオ視聴（以下、テレビ視聴と略す）時間の長さの関係を精神発達指標を用いて探求することを目的とした。精神発達や生活とテレビ視聴時間の関連が明らかになれば、保護者に対して助言する場合に活かせると考えた。

II. 方 法

1. 調査期間

2005年8月から10月初旬。

2. 対 象

横浜市の2区で、上記期間に1歳6か月児健診を受診した子どもと保護者500組。

3. 研究方法

質問紙調査法。健診会場で各保護者に説明のうえ、質問紙を手渡した。対象者は質問紙に無記名で回答し、健診会場で返却または返送した。

4. 精神発達指標

横浜市の1歳6か月児健診で使用しているチェックリストの6項目を使用した。それらの内容は、「大人のしぐさのまねをする、〇〇持ってきてと言うと持ってくる、保護者と遊びたがる、他の子に関心を示す、質問に指さして教える、呼びかけたときに視線が合う」である。1歳6か月児の精神発達については、これらすべての項目に該当することが順調に進んでいるひとつの目安である。これらの項目は田中昌人の発達の研究¹⁷⁾に基づいている。

5. 質問項目

子どもの性別、月齢、出生順、1歳6か月児健診時の身長・体重・カウプ指数、主な保育者、保育者の就労状況、兄弟数、祖父母との同居状況、発達項目に該当するか、言える言葉、外遊び時間、好きな遊び、テレビ台数、平日・休日にテレビがついている時間、平日・休日に子どもがテレビを見ている時間、食事時とテレビとした。

なお、子どもがテレビを見ている時間は、親

が見ていると判断した時間である。

6. 倫理的配慮

本研究計画は横浜市立大学医学部倫理審査会の承認を得ている。対象者は研究目的を口頭と文書で説明を受け、研究に同意した者のみが回答した。

7. 分析方法

データは統計ソフトパッケージSPSS13.0J for Windowsを使用し、スピアマンの相関係数、独立したサンプルのt検定を用いて分析した。両側で5%水準以上の場合を有意差ありとした。

精神発達指標の信頼性はクロンバッハ α で判定した。クロンバッハ α が0.8以上の時、非常に信頼性が高いと考えられている。

III. 結 果

1. 質問紙の回収数

配布数500に対し、回収数300であり、回収率は60.0%であった。

2. 対象者の基本的属性

対象者の基本的属性は表1のとおりである。対象児300人中、男女はほぼ同数であった。月齢は18か月から21か月であったが、18か月児が91%であり、19か月児までで97%を占めた。同胞については、過半数の54.3%は1人子であり、37.0%は2人、7.7%は3人、1.0%が4人以上で、平均 1.6 ± 0.7 人であった。この値は全国と比較してほぼ同じであった¹⁸⁾。

主たる保育者は1人を除いて母親であった。母親は常勤者14.0%、パートタイマー5.7%、自営業1.7%で、合計21.4%が有職者であった。これは全国の1～2歳児を持つ母親の有職率29%よりやや低かった。

祖父母との同居は5.6%であり、平均家族数は 3.6 ± 0.8 人であった。

子どもの言葉数の平均は 7.8 ± 7.1 語であり、平日の外遊び時間の平均は 84.6 ± 45.7 分であった。好きな遊びは男女とも1位「外遊び」、2位「屋内で体を動かす」であった。

表1 対象者の基本的属性

人 数	男児：146人(48.7%), 女児：150人(50.0%), 不明：4人(1.3%)
月 齢	18か月児：273人(91.0%), 19か月児：19人(6.4%), 20, 21か月児：6人(2.0%), 不明：2人(0.7%)
出生順	第1子：57.0%, 第2子：35.0%, 第3子：7.3%, 第4, 5子：0.7%
同胞数（本人含む）	1人：54.3%, 2人：37.0%, 3人：7.7%, 4人：0.7%, 5人：0.3%, 平均：1.6人
母の就労状況	常勤者：14.0%, パートタイマー：5.7%, その他(自営業等)：1.7%
祖父母との同居	祖母：2.3%, 祖父：0.7%, 祖父母：2.3%, 祖父母と曾祖母：0.3%
家族数	2人：0.3%, 3人：51.7%, 4人：34.3%, 5人：10.0%, 6人：2.7%, 平均：3.6±0.8人
カウプ指数	平均15.7±1.0
言葉数	平均7.8±7.1
外遊び時間	平均84.6±45.7分
1番好きな遊び	男児：外遊び(77.5%), 女児：外遊び(71.1%), 平均：74.2%
2番目に好きな遊び	男児：屋内で体動かす(38.6%), 女児：屋内で体動かす(29.5%), 平均：33.9%

表2 精神発達指標に該当する割合

項 目	該 当	非該当
大人の真似をする	287(95.7%)	13(4.3%)
「○○持ってきて」と言うと持ってくる	257(85.7%)	43(14.3%)
保護者と遊びたがる	286(95.3%)	14(4.7%)
ほかの子に関心を示す	280(93.3%)	20(6.7%)
質問に指さして教える	209(69.7%)	91(30.3%)
呼びかけたときに視線が合う	292(97.3%)	8(2.7%)
平均	5.4項目±0.95	

6項目間のクロンバッハ α は0.517。「質問に指さして教える」と6項目中当てはまる数との間のクロンバッハ α =0.7794

表3 テレビに関する項目

テレビ台数	0台：0.3%, 1台：54.3%, 2台：36.3%, 3台：8.0%, 4台以上+不明：1.0%, 平均1.7台±0.7
平日テレビをつけている時間	0～20時間の範囲 平均6.2時間 SD=±3.2
平日子どもが見る時間	0～8時間の範囲 平均2.4時間 SD=±1.2
休日テレビをつけている時間	0～20時間の範囲 平均6.3時間 SD=±3.9
休日子どもが見る時間	0～8.5時間の範囲 平均2.3時間 SD=±1.6
食事時とテレビ	いつもつけている：20.6%, 時々消す：54.8%, つけていない：24.5%

3. 1歳6か月児の精神発達の状況

精神発達の指標とした6項目の、それぞれに該当する者の割合を表2に示した。もっとも難しかった、「質問に指さして教える」という項目の該当割合は約7割で、該当する項目数の平均は5.4±0.9であった。6項目間のクロンバッハ α は0.517であった。が、1歳6か月児に特徴的発達指標である「質問に指さして教える」という項目¹⁷⁾と、今回指標とした6項目のうち該当する数との間の関連性を示すクロンバッハ α は0.779であった。すなわち、1歳6か月児の精神発達指標として6項目の該当する数を使うことは信頼できると考えられる。

4. テレビに関する項目について

テレビに関する項目の結果を表3に示した。平日テレビがついている時間の平均は6.2±3.2

時間であり、休日の場合は6.3±3.9時間で、ほぼ同様であった。子どもが平日テレビを見る時間の平均は2.4±1.2時間であり、休日は2.3±1.6時間で、やはり同様であった。

5. 精神発達指標、生活、テレビ視聴時間の関係

精神発達指標、生活、テレビ視聴時間の相関を表4に示した。精神発達指標は言葉数、外遊び時間と正の相関があり、平日テレビを見る時間、休日テレビを見る時間とは負の相関があった。しかし、性別、カウプ指数、兄弟数、家族数、平日・休日にテレビをつけている時間との間には有意な相関がみられなかった。

同胞数と、言葉数には負の、休日テレビを見る時間には正の、弱い相関が見られた。

外遊びは精神発達指標、言葉数と弱い正の相関があり、また、平日テレビがついている時間・

表4 精神発達指標、生活、テレビ視聴時間の相関（スピアマンの相関係数）

	精神発達 指標	性	カウプ 指数	兄弟数	家族数	言葉数	外遊び 時間	平日つけ る時間	子が平日 見る時間	休日つけ る時間	子が休日 見る時間
精神発達指標	1.000	.106	-.035	-.038	-.025	.330**	.150*	-.084	-.120*	-.110	-.208**
性 別	.106	1.000	-.119*	.008	.001	.141*	-.096	-.092	-.055	-.105	-.058
カウプ指数	-.035	-.119*	1.000	-.083	-.041	-.087	.068	.012	-.004	.023	.020
兄弟数	-.038	.008	-.083	1.000	.898**	-.132*	-.090	.033	.041	.025	.132*
家族数	-.025	.001	-.041	.898**	1.000	-.109	-.070	.040	.032	.018	.105
言葉数	.330**	.141*	-.087	-.132*	-.109	1.000	.119*	-.052	-.079	-.119*	-.175**
外遊び時間	.150*	-.096	.068	-.090	-.077	.119*	1.000	-.277**	-.208**	-.161**	-.110
平日つける	-.084	-.092	.012	.033	.040	-.052	-.277**	1.000	.526**	.611**	.297**
子が平日見る時間	-.120*	-.055	-.004	.041	.032	-.079	-.208**	.526**	1.000	.409**	.547**
休日つける時間	-.110	-.105	.023	.025	.018	-.119*	-.161**	.611**	.409**	1.000	.522**
子が休日見る時間	-.208**	-.058	.020	.132*	.105	-.175**	-.110	.297**	.547**	.522**	1.000

* : 5 %水準で有意（両側） ** : 1 %水準で有意（両側）

子どもが見ている時間、休日テレビがついている時間と負の相関があった。

子どもが平日テレビを見る時間は平日・休日にテレビがついている時間や休日見る時間とは正の相関があった。そして、子どもが休日テレビを見る時間は、言葉数と弱い負の相関がみられ、平日・休日テレビがついている時間と正の相関がみられた。

食事時にテレビを消しているか否かと生活との関係では、テレビ台数、平日・休日にテレビをつけている時間、子どもが平日・休日にテレビを見ている時間に有意差が見られ、食事時にテレビを消している者はテレビの台数が少なく、テレビをつけている時間、子どもが見ている時間が短かった（表5）。家族数、精神発達指標、言葉数、外遊びとの間には有意差が見ら

表5 食事時のテレビと生活の関係

	N	平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率(両側)
家族数 (食事時ついていない) (食事時ついている)	74 223	3.70 3.60	.823 .764	.974	295	.331
精神発達指標 (ついていない) (ついている)	75 225	5.52 5.32	.795 .989	1.770	156.335	.079
言葉数 (ついていない) (ついている)	70 218	8.56 7.58	7.434 6.988	.999	286	.318
外遊び時間 (ついていない) (ついている)	75 218	91.20 82.36	49.092 44.352	1.448	291	.149
テレビ所有台数 (ついていない) (ついている)	75 224	1.33 1.62	.553 .718	-3.538	163.669	.001 (**)
平日ついている時間 (ついていない) (ついている)	75 223	4.17 6.84	2.286 3.204	-7.868	178.192	.000 (**)
平日子どもが見る時間 (ついていない) (ついている)	75 222	1.98 2.57	1.146 1.266	-3.542	295	.000 (**)
休日ついている時間 (ついていない) (ついている)	73 216	4.01 7.13	2.483 3.715	-8.102	186.395	.000 (**)
休日子どもが見る時間 (ついていない) (ついている)	66 201	1.64 2.46	1.041 1.647	-4.691	177.009	.000 (**)

れなかった。

IV. 考 察

1. 横浜市2区の1歳6か月児の特徴

今回のサンプルでは、過半数の子どもが第1子であり、90%以上の子どもの同胞が本人を含めて1人または2人であった。そして、祖父母との同居は5.7%にとどまっていた。全国で児童のいる三世代世帯の割合は22.5%である¹⁸⁾から、横浜の割合は全国よりも低かった。サンプルは核家族が大部分であると同時に、その構成人員も少ないという特徴がある。

母親の就労率はパートを含めても約2割である。すなわち多くの子どもは1日中母親と生活を共にしており、受ける影響の大きいことが推察される。

子どもが好きな遊びは男女とも「外遊び」が1位を占めていたが、平均外遊び時間は85分であり、十分な時間とはいえないだろう。好きな遊びの2位は、やはり男女とも「屋内で体を動かす」であった。これらは、この年齢の子どもはじっとしているよりも体を動かしたいという欲求が大きいことを示していると考えられる。

児童一般の好きな遊びで、1位は男児ではミニカー、女児では歌・踊りで、テレビが男女とも2位である¹⁸⁾。しかし、普段の遊びの1位は男女ともテレビであり、2位は男児ではミニカー、女児ではお絵かきであった。児童一般では、好きな遊びよりも手軽なテレビが優先されていることが推察される。子どもをテレビ漬けにさせない工夫が必要であろう。

2. 精神発達指標とテレビ視聴時間の関係

今回の調査結果では、1歳6か月児が平日見る時間の平均は 2.4 ± 1.2 時間であり、休日は 2.3 ± 1.6 時間であった。加納らの調査⁴⁾ではこの年齢のテレビ視聴時間は 2.1 ± 1.5 時間で、ほぼ同様であった。

今回の調査では、1歳6か月児の精神発達指標と、子どもが平日・休日にテレビを視聴する時間の長さとの間に負の相関があった。この関連性はそれほど強いものではないが（平日 -0.120^* 、休日 -0.208^{**} ）、1歳6か月の時点ですでに関係が示唆されたことは重要であ

る。精神発達や言葉数がテレビを見る時間と負の相関が見られたことは、加納ら⁴⁾の研究結果とはほぼ同様である。

1歳6か月の時点では、精神発達指標と平日・休日に子どもが見る、見ないに関わりなくテレビがついている長さの間には有意な相関関係はみられなかった。

しかし、平日・休日にテレビがついている長さ、子どもが平日・休日見る時間には強い正の相関があった（平日ついていると平日見る $.526^{**}$ 、休日ついていると休日見る $.522^{**}$ ）。

そして、子どもがもっとも好きな遊びである外遊び時間は、特に平日テレビをつけていたり、子どもが見ている時間の長さ、と負の相関が見られた。

すなわち、テレビがついている時間が長ければ、子どもが見る時間も長くなる。それに伴い、精神発達や外遊び時間にも影響が出るということが考えられる。

また、同胞との関係では、同胞が多い方が言葉数は少なく、休日にテレビを見ている時間が長い傾向がみられた。これは、子どもの数が多くなると、保護者は子どもたちと一緒にテレビを見せ、その結果テレビを見る時間が長くなり、言葉数に影響が出ていることが推察される。

一方、食事時にテレビを消している者は3割未満であったが、つけている者に比べて、テレビをつけている時間、子どもが見ている時間が短かった。それ故、親と一緒に話し合い、まず、食事時に消すことを実施することで、テレビがついている時間や子どもの視聴時間を短縮できるであろう。食事時は親子が向き合い、会話が增加することが期待できる。さらに、子どもが一層外でのびのびと遊び、発達していくことにつながる可能性がある。

子どもが十分に体を動かしたり、人との関わりを充実させて生活できるよう、周囲の大人は配慮したい。テレビよりも、人や自然と関わる体験を沢山積み重ねることで、昨今いわれている聴けない、待てない、集中できない、というような現象は、少なくなると考える。

V. 研究の限界

本研究の限界として、調査用紙の回収率が

60.0%であり、1歳6か月児の全体を代表しているとはいえない。

また、今回の研究結果はテレビ視聴時間と1歳6か月児の発達指標や、外遊び時間が関連しているという段階でしかない。今後は、3歳になったときの精神発達や遊び等とテレビ視聴時間の関係を追跡したり、保護者と共にテレビの見方を考え、視聴時間の変化と子どもの変化を追うような介入研究を実施して、テレビの長時間視聴と精神発達、生活の関係をさらに探求すべきであろう。

謝 辞

本研究にご協力いただいた、保護者の皆様、横浜市金沢区・泉区福祉保健センター職員の皆様に心から感謝いたします。

なお、本研究の要旨は日本地域看護学会第9回学術集会にて発表した。

引用文献

- 1) 国際連合統計局編. 文化および通信19テレビおよびラジオ受信機. 世界統計年鑑第42巻, 初版, 東京: 原書房, 1995.
- 2) NHK 放送文化研究所編. NHK データブック世界の放送2005. 初版. 東京: NHK 出版, 2005.
- 3) 片岡直樹. テレビ・ビデオが子どもの心を破壊している!. 初版. 東京: メタモル出版, 2001.
- 4) 加納亜紀, 高橋香代, 片岡直樹. テレビ・ビデオの長時間視聴が幼児の言語発達に及ぼす影響. 日本小児科学会雑誌 2004; 108 (11): 1391-1397.
- 5) 家島 厚, 山口文佳, 桑島克子. テレビ育児と情緒発達の遅れ—言語発達遅滞児の増加—. 茨城県立病院医学雑誌 2004; 21 (4): 227-234.
- 6) 谷村雅子, 高橋香代, 片岡直樹他. 乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です. 日本小児科学会雑誌 2004; 108 (4): 117-120.
- 7) Kate Moody: Growing up on Television. First edition. New York, USA: Times Books; 1980. 市川孝一監訳. テレビ症候群. 初版. 東京: 家の光協会, 1982.
- 8) American Academy of Pediatrics Committee on Public Education. Media Education. Pediatrics 1999; 104 (2): 341-343.
- 9) Huston A, Wright JC. Television and Socialization of Young Children. in Cantor J et al. (eds). Tuning in to Young Viewers Social Science Perspectives on Television. First edition. Thousand Oaks, USA: Sage, 1996. 37-60.
- 10) Dietz WH. How to Tackle the Problem Early? The Role of Education in Prevention of Obesity. International Journal of Obesity 1999; 23 Supple 4: s7-s9.
- 11) Roemmich JN, Gurgol CM, Epstein LH. Open-loop Feedback Increases Physical Activity of Youth. Medicine & Science in Sports & Exercise 2004; 36 (4): 668-673.
- 12) Cheng TL, Brenner RA, Wright JW, et al. Children's Violent Television Viewing: Are Parents Monitoring?. Pediatrics 2004; 114 (1): 94-99.
- 13) Hancox RJ, Milne BJ, Poulton R. Association of Television Viewing during Childhood with Poor Educational Achievement. Arch Pediatr Adolesc Med. 2005; 159: 614-618.
- 14) Christakis DA, Zimmerman FJ, DiGiuseppe DL, et al. Early Television Exposure and Subsequent Attentional Problems in Children. Pediatrics 2004; 113 (4): 708-713.
- 15) Singer DG, Singer JL. Developing Critical Viewing Skills and Media Literacy in Children. Ann Am Acad Polit Soc Sci. 1998; 557: 164-169.
- 16) Jason LA, Fries M. Helping Parents Reduce Children's Television Viewing. Research on Social Work Practice 2004; 14 (2) 121-131.
- 17) 田中昌人, 田中杉恵. 子どもの発達と診断3 幼児期I 初版. 東京: 大月書店, 1984.
- 18) 日本能率協会総合研究所編. 日本の人口統計総覧2006年. 初版. 東京: 生活情報センター, 2006.

[Summary]

This study investigated the relationship between a mental development index for 18-month-old infants, their daily life and their television/video viewing hours through the use of a questionnaire. The participant sample included 18-month-old in-

fants and their parents who were resident in two separate wards of Yokohama City. The questionnaire was distributed to 500 households from which 300 responses were received. The response rate was 60.0%.

The mental development index had a positive correlation with the number of words an infant could use, and with the amount of time spent playing outside the home. In contrast, there was a negative correlation with regard to the number of hours that infants watched television/video on weekdays/weekends.

In addition, there was a strong correlation between the number of hours that infants watched television on weekdays/weekends and the number of the hours the television/video was switched on.

Both the number of hours the television/video was switched on and the number of hours that infants watched television on weekdays were negatively correlated with the amount of time spent playing outside the home. It was found that families who switched off the television/video at mealtimes were able to reduce the hours of switched on and infants watched it less.

It appears that switching off the television/video at mealtimes may be a useful starting point for parents in helping to reduce the total amount of viewing time for infants.

[Key words]

18-month-old infants, a mental development index, infants' daily life, television/video viewing hours